人麻呂歌集と人麻呂作歌

――その関連についての一考察――

橋本達雄

万葉集の中には柿本人麻呂作と明記されていて、確実に人麻呂の作品と認められているものが、主として巻一から巻四迄の中に八十首程見出される。しかし、この外に題詞や左注に、「柿本人麻呂歌集中に出づ」とされている歌が、巻七、十、十一、十二などを中心として三百七十首程見出される。ではこの人麻呂歌集の歌の作者は、その名が示す如く、人麻呂であったかというと、無条件に決定し得ぬ幾多の疑問が持たれている。その中には、明らかに人麻呂以外の名の作者が現われて居り、又個人的創作と見るに支障があると一般に考えられている民謡的作品の多くが発見されるからである。しかし又一方、格調・内容・語句等に亘って、人麻呂作品と著しく類似した作品も相応に見出されて居り、直ちに人麻呂作ではないと断定されぬものを含んでもいる。

従って、今日迄、人麻呂歌集の作者については、人麻呂以外の作者名のある少数の歌を除いて、大部分は人麻呂の自作であろうとする見方と、その反対に、大部分は人麻呂やその他の人々の集めた民謡で、いくらかは人麻呂の自作も入っていたかも知れない、とする見方などがあり、大別するとこの二つの見方が双方とも相応の言い分があって全く対立していると言える。

私としては前者の見方、即ち、大部分は人麻呂の自作と認める立場を支持するのであるが、その理由の一つとして、例を枕詞にとって述べて見たいと思う。

人麻呂がその長歌・短歌に於て、実に多くの枕詞を巧みに使いこなしたこと、又自身の発明によって独創的な情趣に富んだ新しい枕詞を作ったり、かかり方に工夫を凝らし変化を求めたりして、作品に華麗さを添え、荘重な調べを形成し、高い文芸的成果を収めていることは周知の事実である。具体的な事例については沢瀉博士の『万葉の作品と時代』所収「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」などの御論考に詳しいので今は省くが、その数量のみを見ても、人麻呂だけが用いた独創的な枕詞は七例を数え、人麻呂に初出して後の人達に用いられたと考えられるものは十五例にも上っている。もっともこれは万葉集だけに現われた現象であって、今日人麻呂以前の文献の少ない関係上、人麻呂より先に用いられたことがあったと考えるのも十分可能であるが、その大部分は人麻呂が創めたものと見て大きな狂いはなかろうと思わ

れる。この点に関して、人麻呂歌集の枕詞はどうかと見ると、これ又殆ど同様なことが云えるのであって（沢瀉博士前掲論文・石井庄司氏『古典考究万葉篇』所収「人麻呂集考」参照）、人麻呂歌集のみのものは、私の追加したものも含めて十六例、人麻呂歌集に初出して後世に用いられているものは四例を数える。その上に、これら独創的な枕詞の中には、両者のみにあって他に全然認められないもの、及び他に例の少いものなどが数例あって（大久保正氏『万葉の伝統』所収「人麻呂歌集と人麻呂作歌」・石井氏前掲論文参照）、両者の関係の浅からぬことが一応想定されるのである。

○

簡単ではあるが諸先学の御論考に導かれつつ、大握みに見て来た私の想定を些か具体的にして行くために、一首の中に枕詞を二つ用いている特殊な短歌に焦点を絞って、次に見て行きたい。

便宜上、万葉集を、沢瀉博士、森本博士の『作者類別・年代順万葉集』に従って四期に分け、作者未詳を別に掲げ、人麻呂歌集を第二期に入れた。以下各期別に作品を列挙する。

枕詞を二つ持つ短歌一覧表

第一期（なし）

第二期（十四首）

1　あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも（2―一六九　人麻呂）

2　敷妙の袖かへし君玉垂の越智野過ぎゆくまたも逢はめやも（2―一九五　人麻呂）

3　真草苅る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し（1―四七　人麻呂）

4　玉藻苅る敏馬を過ぎて夏草の野島が埼に船近づきぬ（3―二五〇　人麻呂）

5　ぬば玉の夜霧は立ちぬ衣手を高屋の上にたなびくまでに（9―一七〇六　人麻呂歌集、舎人皇子作）

6　松反りしひてあれやは三栗の中ゆ上り来ず麻呂といふ奴（9―一七八三　人麻呂歌集、妻の作）

7　玉かぎる夕さり来れば猟人の弓月が嶽に霞たなびく（10―一八一六　人麻呂歌集）

8　ひさかたの天の河原にぬえ鳥のうら嘆けましつすべなきまでに（10―一九九七　人麻呂歌集）

9　ぬばたまのこの夜な明けそ朱らひく朝行く君を待つは苦しも（11―二三八九　人麻呂歌集）

10　あらたまの年ははつれどしきたへの袖かへし子を忘れて念へや（11―二四一〇　人麻呂歌集）

11　敷妙の衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ吾を待ちがてに（11―二四八三　人麻呂歌集）

12　解衣の恋ひ乱れつつ浮まなご生きても吾はあり渡るかも（11―二五〇四　人麻呂歌集）

13　まそ鏡見とも言はめや玉かぎる石垣淵の隠りたる妻（11―二五〇九　人麻呂歌集）

14　玉藻苅る沖へは榜がじ敷妙の枕のあたり忘れかねつも（1―七二　藤原宇合）

第三期（二首）

15　水沫なす微き命も拷縄の千尋にもがと願ひくらしつ（5—九〇二　山上憶良）

16　大伴のみつとは言はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも（4—五六五　賀茂女王）

第四期（七首）

17　うつせみの人目を繁み石橋の間近き君に恋ひわたるかも（4—五九七　笠女郎）

18　鴨じもの浮宿をすれば蜷の腸か黒き髪に露ぞ置きにける（15—三六四九　遣新羅使氏名未詳）

19　あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに音のみし泣かゆ（15—三七三二　中臣宅守）

20　こもり沼の下ゆ恋ひあまり白浪のいちじろく出でぬ人の知るべく（17—三九三五　平群氏女郎）

21　ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月かたぶきぬ（17—三九五五　土師道良）

22　あかねさす昼は田たびてぬばたまの夜の暇に摘める芹子これ（20—四四五五　橘諸兄）

23　うち靡く春を近みかぬばたまの今宵の月夜霞みたるらむ（20—四四八九　甘南備伊香）

作者未詳（十首）

24　玉梓の妹は珠かもあしひきの清き山辺に蒔けば散りぬる（7—一四一五）

25　冬ごもり春さり来らしあしひきの山にも野にもうぐひす鳴くも（10—一八二四）

26　白細の袖離れて宿るぬばたまの今夜ははやも明けば明けなむ（12—二九六二）

27　（20、平群氏女郎の歌と同じ）（12—三〇二三）

28　うちひさす宮にはあれど鴨頭草の移ろふ情吾が念はなくに（12—三〇五八）

29　うつせみの人目繁くばぬばたまの夜の夢にを続ぎて見えこそ（12—三一〇八）

30　草枕旅にし居れば刈薦の乱れて妹に恋ひぬ日はなし（12—三一七六）

31　玉葛たえず行かさね山菅の思ひ乱れて恋ひつつ待たむ（12—三二〇四）

32　あらたまの年の緒長く照る月の脈かざる君や明日別れなむ（12—三二〇七）

33　ひさかたの都を置きて草枕旅行く君を何時とか待たむ（13—三二五二）

合計　三十三首、内重出一首、

重出の一首を別とすれば、実際は三十二首となる。中には枕詞かどうかの判定上、実景とも比喩とも思われるものもあるが、一応枕詞と思われるものは含めたつもりである。又見落しはないと思うが、もしあったとしても一、二首であろうから大勢に影響はないであろう。

さて、この一覧表の示すところによれば、第一期には該当歌がない。因みに記紀歌謡中にも発見されない。しかるに第二期に入ると、人麻呂が四首、人麻呂歌集が九首、宇合が一首と急激にそ

の数を増している。しかもその大部分は人麻呂と人麻呂歌集によって占められていることがわかる。これら人麻呂歌集歌の中には二首、明らかに人麻呂以外の人の歌が混っているのであるが、その舎人皇子は、人麻呂歌集中、他にも名が見え、人麻呂歌集の作者が献った歌があり、加えて人麻呂と深いつながりがある人の多い天武天皇の皇子の一人である。従って人麻呂と関係があったらしいと考えられないこともないのであるが、少くとも人麻呂歌集の或る作者とは密接な関係のあったことが判る。もう一人は妻とある人で、その歌中に「麻呂」と詠み込んでいる人である。今はこれを直ちに人麻呂と見て、その妻であるとは云えぬにしても、人麻呂歌集歌の或る作者の妻であったのである。共に人麻呂歌集の或る作者――私はこれを人麻呂歌集の他の七首の作者と同一人と見たいのであるが――と作歌上に深いつながりがあり、その影響下にあった人と思われるのである。これらのことを考慮に入れて見ると、十四首中の一首、宇合作を除いて、他の全部が人麻呂作と人麻呂歌集の中に見出されているということは、極めて注目すべき類似であろうと考えられる。

○

枕詞の発生は、万葉集時代に入る前のかなり古い時代迄遡り得るものであって、数々の発生論はあるが、本来は「呪的なほめ詞」（土橋寛氏『古代歌謡集』解説「日本古典文学大系」）であったらしいと言われている。しかし万葉集時代では、既にその性質が失われて来て、専ら、修辞と声調の上で大きな役割を担って来るようになっている。その最たるものは人麻呂の長歌に見られるのであって、一句一句枕詞を添えて、荘重さと華麗さを発揮させているが如き用法は、正しく彼の文芸的自覚によってもたらされたものと思われ、そこに様々な創意工夫が凝らされたという感を深くする。短歌の中に二つの枕詞を入れるということも、この文芸的自覚と無関係であったとは考えられず、記紀歌謡、第一期にはなく、人麻呂に至って初めて現われるということは、推測すれば、人麻呂の長歌に用いた手法の反映と見られないこともなく、人麻呂によって創められた用法ではなかったかとさえ思われる。

翻ってこれを作歌技術上から考えてみると、こういう詠み方をして作品を活かすというのは果して容易なことであろうか。端的に私見を述べるならば、相当に高度な手腕と技術を要するものではないかと思われる。何故ならば、短かい三十一音の短歌形式の中に、二つの虚語を入れるということは、下手をすれば虚飾に陥り易く、浮わついた空疎なものになり終る恐れが十分にあるからである。この観点から人麻呂作品に目を注ぐと、1はともかく、2、3、4、いずれも人麻呂作品中の傑作と称せられているもので、特に3、4には実景とも見られる生き生きとした枕詞を用いて一首を躍動させている。いずれも美事に二つの枕詞を使いこなしていることが判るであろう。これに対して第三期以降の作品では、概して平凡な枕詞を用いて、虚飾的で空疎な傾向は覆い難く、中には人麻呂作1の無自覚な踏襲を思わせる19、中臣宅守作、22、橘諸兄作なども発見される。

このような中にあって、人麻呂歌集の場合はどうかと見ると、7の「玉かぎる」「猟人の」、8「ぬえ鳥の」、9「あからひく」、

11の「玉藻なす」、12「浮まなご」など、独特な趣きを持つ枕詞を随所にさしはさんで、作品に生趣を与えようとする努力が窺われ十分に二つの枕詞が一首の中に溶け込んでいる例を多く見るのである。そしてこのことが又、第四期のものなどに比べて、作品の質を低下させない要因ともなっているように思われる。

即ち、このような特殊な短歌は第二期に於て、人麻呂と人麻呂歌集の外は殆ど例がなく、特異なものであること、次に作歌技術上、困難を思わせるものを共に使いこなしていて、第三期以降のように虚飾的でないこと、又万葉集全体から見ても、一人の作者が二首とこのような歌を残していないことなどから考えて、両者の関係が密接なものであろうという推察をしたものである。

○

今迄なして来た考察は、主として量的な関連を基にして述べたものであった。しかし、ここで、人によっては、人麻呂歌集は人麻呂が主となり、自己の好みに従って集めたものだから、おのずからその好尚が選択の基準となって、このような結果が現われて来たのではないか、だから人麻呂歌集に、枕詞が二つある短歌が多いといっても、直ちに人麻呂作に結びつけるには不十分ではないか、という疑問が、当然持たれるものと考えられる。そこで、これら人麻呂歌集に用いられている枕詞が如何なる性格のものであるか、次に検討して見たい。人麻呂歌集の7から13までの枕詞の中から順を追って見て行くとまず、7の「玉かぎる」がある。これは13にも用いられているのであるが、集中の用例を検すると次のようになる。

1―　四五　玉かぎる夕さりくれば　（人麻呂）
2―　二〇七　玉かぎる磐垣淵の　（〃）
2―　二一〇　玉かぎるほのかにだにも見えぬ　（〃）
10―一八一六　玉かぎる夕さり来れば　（人麻呂歌集）
11―二三九四　玉かぎるほのかに見えて　（〃）
11―二五〇九　玉かぎる石垣淵の　（〃）
8―一五二六　玉かぎる髣髴（ほのか）に見えて　（山上憶良）
10―二三一一　玉かぎるただひと目のみ　（作者未詳）
11―二七〇〇　玉かぎる石垣淵の　（〃）
13―三二五〇　玉かぎる日も重なり　（〃）

合計十例のうち、三例が人麻呂、三例が人麻呂歌集、憶良は作歌年代が降ると認められるので直接比較の対象とならないとして除外すれば、作者未詳の三例はあるにしても、まず一見して両者の大きな共通点であると云ってよい。しかも、それは単に数的なものばかりではなく、そのかかり方を見ても両者は「夕さりくれば」「ほのかに」「石垣淵」と一例ずつ、全く同様な用い方をしている。この枕詞には、五種類のかかり方があって、この外では10―二三一一の「ただひと目」と13―三二五〇の「日も重なり」があるが、人麻呂歌集と人麻呂の間には、三種迄共通であって、他の用法がないということは、両者の作者が同一人であったことを指示すると云えないであろうか（沢瀉博士前掲論文参照）。その人が人麻呂であろうことは言う迄もない。

次ぎは、同じく7の「猟人の」であるが、これは、12の「浮まなご」と共に、集中、ここのみにしか用いられていない特殊な枕

詞である。共に独創的で新しさを感じさせる点で、人麻呂作の枕詞と非常に相似た関係にあるということが出来、人麻呂が初めて作ったものとするにふさわしいと考えられる。

次に8の「ぬえ鳥の」を見る。

2— 一九六 ぬえ鳥の片恋嬬 (人 麻 呂)
10—一九九七 ぬえ鳥のうら嘆けましつ (人麻呂歌集)
10—二〇三一 ぬえ鳥のうら嘆け居りと (〃)
5— 八九二 ぬえ鳥ののどよひ居るに (山上憶良)
17—三九七八 ぬえ鳥のうら嘆けしつつ (大伴家持)

集中の用例は以上の五例である。その中、憶良は前にあったように除外して考えてよく。家持もまた同様である。すると、この枕詞の用法も、人麻呂と人麻呂歌集にわたる緊密な共通点であると云ってよく、人麻呂歌集のものが人麻呂の作であろうということに強く結びついてくるのである(大久保氏前掲論文参照)。

次ぎは9の「あからひく」である。集中の用例は、

10—一九九九 あからひくしきたへの子を (人麻呂歌集)
11—二三八九 あからひく朝行く公を (〃)
11—二三九九 あからひく府にも触れず (〃)
4— 六一九 あからひく日も暮るる迄 (大伴坂上郎女)

の四例で、人麻呂歌集以外では大伴坂上郎女の一例があるだけである。坂上郎女は家持らと共に、人麻呂歌集を学んだ形跡の濃厚に見てとれる人であり、又時代的にも前と同様比較上は除外して考えてよい。同じ枕詞が同じ歌集の中にあって、他はそれを学んだとも考えられる一例しかないとすれば、少くともこの三首は同一人によって詠まれたものであろうことを思わせる。この同一人が作ったと見られる現象は人麻呂歌集を少しく細かく見る時、随所に発見されることであって、人麻呂歌集の歌が決して民謡のアトランダムな集成ではなく、大部分は同一人の作即ち人麻呂作と見るべき条件ともなるのであろうと考えているが、今は暫く措くとして、この「あからひく」の場合、その独特なものであるという点から、さきにあった「猟人の」や「浮まなご」と同様に人麻呂作ではないかと思わしめるのである。

次は10の「しきたへの」に移るが、この枕詞自体は、取立てて特殊だとも、人麻呂だけが用いているというものでもなく、集中の用例は三十五例の多きを数える。しかし、そのかかり方で、袖にかかるものは僅かに四例しかない(石井氏前掲論文参照)。

2— 一九五 しきたへの袖かへし君 (人 麻 呂)
2— 一九六 しきたへの袖たづさはり (〃)
11—二四一〇 しきたへの袖かへし子を (人麻呂歌集)
17—三九七八 しきたへの袖反しつつ (大伴家持)

このうち、人麻呂が二例、人麻呂歌集が一例、家持が一例となっている。一九五の歌は前に掲げた枕詞を二つ持つ短歌の中の2のものである。そして、これと人麻呂歌集の10の場合は全く同じかかり方をしていることに気附くのである。「袖かへし」は「袖をさし交わす」意味であるが、これを学んだと思われる家持の例は「袖を反す」意に用いてあって、これらと異なっている。こう見ると、用い方の点に於て、人麻呂作と人麻呂歌集との関連が、例によって非常に深いと思わざるを得ないであろう。この場合も又、人麻

呂歌集の歌が人麻呂作であろうことを示していないであろうか。

最後に11の「玉藻なす」について述べる。人麻呂は婦人の姿態を描き出す時、好んで藻に喩えるとは一般に知られていることであって、長歌の中に幾度か用いているのであるが、この「玉藻なす」も、その一つの現われとして、最も人麻呂的なものとも云うことができよう（武田博士『国文学研究、柿本人麻呂攷』・大久保氏前掲論文参照）。

用例は次の七例である。

2—　一三一　玉藻なすより宿し妹を　（人麻呂）
2—　一三五　玉藻なすなびき寐し児を　（〃）
2—　一三八　玉藻なすなびきわが宿し　（一三一〃の異伝）
2—　一九四　玉藻なすかよりかくより靡かへし（人麻呂）
11—二四八三　玉藻なすなびきか宿らむ　（人麻呂歌集）
1—　五〇　玉藻なすうかべながせれ（藤原宮之役民の歌）
19—四二一四　玉藻なすなびきこひふし　（大伴家持）

前にもあったように家持は人麻呂の模倣と考えてよく（大久保氏前掲論文、又「役民の歌」は、一部では人麻呂作ではないかと云われている程のものであって、或は関係があろうかとも考えることが出来るものである。今はこの問題には触れないが、そのかかり方をみると、人麻呂歌集と同じものが人麻呂作に二例あって、役民の歌はそれらと異っていることがわかる。この点だけから見るならば、役民の歌より人麻呂歌集の方が、より人麻呂的だということが出来るであろう。このように、最も人麻呂的な枕詞が、そのかかり方に於ても共通性を見せながら人麻呂歌集の中に存在していることは、これ又、人麻呂が作ったものであろうということに容易に結びついてくるものではないかと考えるのである。

○

以上によってほぼ明らかにして来たように、これら例に挙げた枕詞は、質的にも人麻呂と無関係でないばかりか、かなり積極的に人麻呂作であろうことを指示しているように考えられる。そして又、注意すべきこととしては、これらの枕詞は、人麻呂歌集の枕詞を二つ用いた短歌の中にあって、一首の中に、必ず一つは用いられているということである。即ち、二つの枕詞のうち、必ず一つは、人麻呂作と密接な関係を有する枕詞か、特異な独創的な枕詞を用いているのである。この事は、人麻呂歌集の作者が、一首の短歌に枕詞を二つ詠み込む場合には、実に細心の注意を払いつつ、一箇所には必ず斬新な枕詞を配したことを物語っている。これがまた作品の一つの魅力ともなっていて、特に第四期の例のように、新味のない空疎な作品の多いのと区別される所以ではないかと思われ、同時に作者の苦心の跡が見えているとも云える。もしも人麻呂歌集が単なる民謡の集成であるとしたら、果してこのようなことが指摘できるであろうか。私はむしろ、人麻呂の大才をもってしても、一首の中に枕詞を二つ用いる場合には、如上のような細心の注意と苦心が払われなければならなかったということをここで考えたい。

さて私は、枕詞を二つもつ短歌の量的な関連と質的な類似を通して、人麻呂歌集中の、少くともこれらの歌は人麻呂の作ではないかということを考えて見た。しかしこれらの歌は、一箇所にまとまって存在するものではなく、巻も二つにわたり且つ散在して

いるものである。だからこれらの歌が人麻呂作であると認められるならば、人麻呂歌集中にはまだ多くの人麻呂作品が混入していると考えられてくるであろう。勿論これのみを以って直ちに全人麻呂歌集を律し去ることは出来ないが、両者の関係が密接であるということを証する一助にはなし得るのではないかと考えるものである。

尚、二つの枕詞を持つ短歌が、第三期にも少く、第四期に入って相応に見出される理由は、現在明確にはなし得ないが、時代的に見て文芸としての和歌に様々の効果を与えようとする努力が払われるようになったのではないか。又、人麻呂の風が第四期に入って、家持やその周辺の人々によって、よく学ばれていることなどと関係があるのではないかと思う。前にも一寸触れたように人麻呂作の1の用い方が、第四期の19、22と同様である点に、その影響らしいものを認めることが出来るのではなかろうか。又、作者未詳に十首あるが、大方は比較的新らしい時代の作品と考えられている巻七・十・十二などであって、これも第四期に多い理由と似た関係にあるのではないかと思わせられる。このような用法は矢張り文芸的自覚と切離せないものであって、民謡的な巻十一（人麻呂歌集を除く）、巻十四などに一首もないことがそれを物語っているようである。

紹　介

金成まつ筆録
金田一京助訳注
アイヌ叙事詩　**ユーカラ集 I**

金田一京助博士・知里真志保博士訳注、金成まつ氏筆録の「ユーカラ集」全二〇巻のうち、第一巻「PONOINA（小伝）」が、昨年十二月に出版された。

「ポン・オイナ」は九編からなるオイナカムイの恋愛詩である。邦訳は金田一博士独得の、流れるような美しい詩文であり、文学作品としての価値は言うまでもない。

その上、アイヌ語と日本語とが一語一語対訳され、脚注も豊富であるから、言語学研究者には必携の書と言える。今後十年の長きにわたって、年二巻ずつ配本の予定と伺う。金田一先生の米寿の折には、全二〇巻の完成を見ることができよう。切に切に、先生の御健康をお祈り申し上げる。

（三省堂刊・A5判・八五〇円）

祐田善雄
鳥越文蔵校　**「上方狂言本」**

「上方狂言本」の第一冊目として出版された本書は、〈和歌浦片男波・阿闍世太子倭姿・日本阿闍世太子・念彼観音力〉の四篇を収めている。各篇について祐田善雄教授の解説がそえられている。古典文庫の他の作品と同じく原本に忠実な翻刻は、この方面の研究者にとってこの上ない研究資料となるであろう。

（古典文典　昭和34・11刊）